

取組み報告（事例紹介）

法人名　：社会福祉法人　かも福社会
事業所名：養護老人ホーム宇寿荘

取組みテーマ

検証する文化を作る。生産性向上実施から見えてきたもの
～before・afterで見えてきた、すき間時間の有効活用～

1. 事業所の概要

法人名 : 社会福祉法人かも福祉会

事業所名 : 養護老人ホーム宇寿荘

所在地 : 雲南市

施設種別 : 養護老人ホーム（一般型特定施設）

定員 : 80名

職員数 : 30人（36人）

2. プロジェクト体制

名称 : カイゼンプロジェクトチーム

メンバー役職名	所属	プロジェクトでの役割
1 施設長	養護老人ホーム宇寿荘	その他
2 係長	養護老人ホーム宇寿荘	書記
3 主任	養護老人ホーム宇寿荘	副委員長
4 主任	養護老人ホーム宇寿荘	その他
5 計画作成担当者	養護老人ホーム宇寿荘	副委員長
6 機能訓練指導員	養護老人ホーム宇寿荘	ICT
7 介護職員	養護老人ホーム宇寿荘	委員長
8 介護職員	養護老人ホーム宇寿荘	改善リーダー
9 介護職員	養護老人ホーム宇寿荘	改善リーダー
10 介護職員	養護老人ホーム宇寿荘	改善サブリーダー
11 介護職員	養護老人ホーム宇寿荘	改善サブリーダー
11 看護師	養護老人ホーム宇寿荘	その他

生産性向上委員会の設置 : ※ あり or なし

今後の体制 : 今回のプロジェクト体制を継続する。

3.取組みの目的

令和 7 年度から業務全体の見直しを検討してきました。気づきアンケートを収集し職員個々に聞くと良い視点、意見を持っているが、生産性向上ガイドラインの習得が出来ておらず、見切り発車の部分が多く行き詰まりを感じている部分がありました。

この度生産性向上の知識を深めることで、宇寿荘の今やるべきことを確認し今後の課題に関しても自分達で進めていけるよう手順、手法を学ぶためにモデル事業の申し込みをさせて頂きました。

4.目的達成に向けた取組

	取組項目	内 容
1	課題の見える化	<ul style="list-style-type: none"> Google フォーム、生産性向上くんによる職員アンケートの実施。
2	課題の抽出	<ul style="list-style-type: none"> 付箋を使用して現場課題マップを作成による課題抽出と因果関係の検証。 宇寿荘での課題は入浴業務である事を認識。
3	入浴業務について	<ul style="list-style-type: none"> 入浴日を増やして週3回から週5日と個浴の午後浴を導入。 事前と事後の効果測定（定量、定性）を実施。 すき間時間のシェア方法の検討。
4	見守りカメラ導入について	<ul style="list-style-type: none"> 見守りカメラ導入理由の明確化。 見守りカメラ効果の事前測定法の検討。 設置場所の検討。 「ピッチ+スマホ」併用、使用方法の課題。

(1) 専門家の伴走支援

期日（年月日）	実施内容	提案・助言のポイント
令和7年9月26日～10月7日	<ul style="list-style-type: none"> 生産性改善アンケート実施 	<ul style="list-style-type: none"> 人員配置の偏り+情報共有の煩雑さ+業務統一の欠如。
令和7年11月27日	<ul style="list-style-type: none"> 課題の抽出。付箋による課題抽出と因果関係。 	<ul style="list-style-type: none"> 具体的に入浴介助が業務負担であり、課題と優先順位を抽出する。 成果が見えない理由として定性評価のみだということ。定量評価も事前、事後に行う。 すき間時間ができたら何をするか考える。
令和7年12月23日	<ul style="list-style-type: none"> 生産性向上の取り組みについての必要性。 入浴業務改善についての取り組みの状況確認。 	<ul style="list-style-type: none"> 人材育成と生産性向上はセットでとらえること。 ピフォーアフター型検証を定着化、習慣化する事でOJT、チームワークとしても実施できる。 事前、事後の効果測定を行い検証する。 改善の目標が設定されていて良い。 すき間時間のシェア方法の検討。

		<ul style="list-style-type: none"> ・マスターラインの設定。 ・検証中に新たな課題が見つければ同時に進めていく。
	・見守りカメラ導入について。	<ul style="list-style-type: none"> ・宇寿荘として見守りカメラをどう使用したいのか明確にする必要がある。 ・見守りカメラは導入前後で訪室回数や転倒件数を測定し、効果を比較。
令和8年1月14日	入浴業務の取り組みの状況確認。	<ul style="list-style-type: none"> ・タイムスタディの意義「評価ではなく検証」として認識する。 ・時間が短くなった／長くなった理由を言語化する文化が芽生えた。 ・感覚とデータのズレはどこにあったか。 ・時間が動いた理由を言葉にできているか。 ・余剰時間の使い方が見え始めているか。
	見守りカメラについて 宇寿荘として、見守りカメラを使って“何を減らしたい・何を守りたい”のか？	<ul style="list-style-type: none"> ・「導入ありきではなく、目的から考える」という共通認識ができている。 ・「導入理由」が完全に“現場言語” ・「期待効果」が“減らす／外せる”発想になっている。 ・「運用ルール」が最初から書かれている。 ・「二重デバイス問題」は“設計課題”として扱う。
令和8年2月13日	振り返り。	<ul style="list-style-type: none"> ・検証のまとめを言語化すること。 ・手順の標準化をもとにマスターラインを決める。 ・すき間時間の使い方、宇寿荘としての方向性は必要。 ・二重デバイス問題のあり方。 ×現場の不満ではなく ○設計課題 ・資料に関しては要約せずに原本で展開する。 ・宇寿荘の成果は検証できるチームになったこと。
	これから起こる宇寿荘での課題。	<ul style="list-style-type: none"> ・生産性向上によるジレンマによる課題。そこをチームとして乗り越えていけるか。成果、結果ではなく、考え方、方向性を言葉にして伝える事ができるのか、が課題である。しかし今回の入浴検証、見守りカメラ検証で行った生産性向上の手順を行えば必ず良い方向へ行く。

(2) 事業所の取組

時期（年月日）	取り組んだ内容
令和7年9月26日～10月7日	・生産性改善アンケート実施。
令和7年11月27日	・課題の抽出（合意形成）付箋による課題抽出と因果関係。
令和7年12月1日～12月27日	・実施前の入浴効果測定。
令和7年12月15日～令和8年1月5日	・見守りカメラ設置利用者の選定と事前測定。
令和8年1月5日	・入浴業務開始。
令和8年1月6日	見守りカメラ導入理由の統一。 「導入理由」が完全に“現場言語” 「期待効果」が“減らす／外せる”発想 「運用ルール」
令和8年1月8日、9日	・Wi-Fi 設置工事
令和8年1月12日～2月8日	・入浴事後実施後の検証実施。
令和8年1月14日	・見守りカメラ設置工事。
令和8年1月26日～2月8日	・使用利用者で使用開始後の検証。

	検証項目	取組み前と後の変化	測定方法	頻度
1	入浴業務改善	【定量】 取組（導入）前（平均） 2時間 36分 取組（導入）後（平均） 2時間 17分 減少時間（平均） 19分 【定性】 取組前 ・入浴介助の時間がかかる。 ・重度化により介護負担が大きい。 取組後 ・最後までゆとりを持って出来た。 ・居室担当業務ができた。	実施前後の タイムスタディ 記録用紙の特記 欄に職員の気づ きを記入 実施前 12/1～12/27 実施後 1/12～2/7	入浴日
2	見守りカメラ導入	【定量】 取組（導入）前（平均）14.2回 取組（導入）後：（平均）6.0回 【定性】 取組前 ・一人夜勤で不安、精神的に負担である。 ・移動距離もあり、体力的に負担である。 取組後 ・夜間2階巡回時、カメラを見ながら1回の対応 ・無駄な訪室が減った。 ・見守りカメラに関してはピッチとスマホの併用課題あり。	実施前後の 訪室回数の測定 実施前 12/15～1/5 実施後 1/26～2/8	毎日 20時～ 7時

5.効果検証

	業務改善した項目	取組み前の状況 (Before)	取組み後の変化(After)
1	・入浴の業務改善	<ul style="list-style-type: none"> ・業務改善についてリーダーだけで話をしていた。 ・時間内に入浴など特定の業務を終わらせることに意識が向いていた。 ・委員会や職員間で話し合う時間が取り難かった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・職員全員で話し合いが出来るようになった。 ・1回の入浴人数が減ったことで、時間的にも精神的にも余裕が生まれた。 ・すき間時間（生まれた時間）でプチカンファレンスや担当利用者の居室対応が可能になった。
2	・夜勤業務の負担感の軽減	<ul style="list-style-type: none"> ・巡回やセンサー作動時の移動距離が体力的に負担だった。 ・コールが鳴ること自体が不安であり負担だった。 ・カメラで夜勤者を監視されるのではという不安があった。 ・コール対応などへの焦りから、ケアの質の確保が難しかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・訪室回数が減り、身体的にも精神的にも負担感が軽減されつつある。 ・録画機能等の運用ルールを明確にしたことで、職員の不安が払拭された。 ・手元のスマホで状況確認できることで、気持ちに余裕が生まれ丁寧な対応が可能になった。
3	職員の意識	<ul style="list-style-type: none"> ・リーダーだけで話し合いをしていた。 ・新しいことへの取り組みは難しいことだと感じていた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・職員が意見を伝える場があり、話し合いが出来るようになった。 ・取り組みに対しての方向性、思いが一致してきている。

6.継続課題

	テーマ	内容
1	課題の抽出（合意形成）	・今後も新しい課題に対して付箋による課題抽出と因果関係の抽出を行い検証していく。
2	マニュアルの整備	・今回の生産性向上モデル事業を実施して最終的にはマニュアルの整理が必要であると改めて感じる部分が多い。改善後はマニュアル整理まで行っていく。
3	人材育成 働きやすい職場作り	・生産性向上を行う事により、職員間のコミュニケーションを図り働きやすい職場、人材育成を継続する。
4	ICTの活用	・見守りカメラ導入により業務の改善や効率化等を進める事により、職員の業務負担軽減を図るとともに、生み出した時間を直接的な介護ケアの業務に活用する。

7.モデル事業所の感想

【心理的安全性】

- ・ 検証する文化と理由を言語化する文化が芽生えた。
- ・ 生産性向上について学べた事、感じた事が大きい。
- ・ 今まで変化もなく仕事をしていたが、今回の生産性向上モデル事業にて自分達で考え、皆の意見を出して施設改善に向かって行きたい。
- ・ 実施する事で文章化、言語化する大切である。それをリーダーサブリーダーが現場に伝えていく事が大切。他メンバーにも共有必要。
- ・ 個々職員が意識を持って意見が言える体制になった。
- ・ 生産性向上を実施することで新たな課題も見えてきた。
- ・ すき間時間に委員会、居室対応、声掛けの仕方が変わってきた。
- ・ 不穏がある利用者さんも夜間眠れるようになってきている。

【入浴業務改善】

- ・ 気持ちに余裕を持って対応できてきた。利用者さんも楽しみに入浴待ってられる。
- ・ 入浴日が増えた事で負担が多くなると思っていたが、時間も少なくなり実際には負担が少なくなった声が上がっている。
- ・ 以前は時間内に終わらないと、という気持ちで焦りがあったが、今は気持ちにゆとりができた。
- ・ 長年の固定観念があったが今回の生産性向上委員会にて変わってきた。

【見守りカメラ】

- ・ 夜間2階巡回時、カメラを見ながら対応できる。
- ・ カメラに関してはピッチとスマホの併用課題、使用してみて便利ではある。
- ・ 体調不良者等での見守りが実施でき安心できた。
- ・ 夜勤者の精神的負担も軽減できる期待をもてる。

生産性向上を実施していく中で入浴業務改善では、入浴日の選択の自由、入浴時間にゆとりが生まれたすき間時間が出来た事。

見守りカメラ導入では、コールがあっても優先順位やカメラで見守れる安心感が生まれ、心理的安全性を高めていく事ができ安心して仕事ができる環境へ向かっていったこと。

以上のことが可能になった原因として職員全体に「検証する文化」「PDSA」が根付いてきた事が変化した要因だと考えています。また今回の成果として「時間が早くなったこと」ではなく、それを言語化して「検証できるチームになったこと」を4回の生産性向上モデル事業の最後のまとめとさせていただきます。

8. 専門家のコメント

本モデル事業における宇寿荘の取組は、単なる業務改善ではなく、「考え方」を変えた取組であったと感じています。

当初は、課題意識や改善の思いはありながらも、どこから手を付ければよいのか、どのように進めればよいのかが整理されていない状況でした。しかし、アンケートによる見える化、付箋による課題整理、因果関係の確認、優先順位の決定というプロセスを丁寧に踏むことで、宇寿荘は「感覚で動く組織」から「設計して動く組織」へと変化していきました。

まず、入浴業務改善では、週3回から週5回への再設計という大胆な見直しを行い、事前・事後のタイムスタディによる検証を実施しました。その結果、平均 19 分の時間短縮という定量的成果が得られました。しかし、私がより価値を感じているのは、職員の皆さんから出てきた「気持ちにゆとりができた」「利用者向き合える時間が増えた」という言葉です。生産性向上とは、単に時間を短くすることではありません。「人にしかできない時間を増やすこと」と私は考えています。宇寿荘では、それが実際に起き始めています。

また、見守りカメラの導入においても、「導入すること」自体が目的になることなく、「何を減らしたいのか」「何を守りたいのか」という原点から議論を重ねました。訪室回数が平均 14.2 回から 6.0 回へと減少したことは明確な成果ですが、それ以上に「夜勤者の不安が軽減された」「丁寧な対応ができるようになった」という心理的变化は非常に重要です。

ICT は万能ではありません。しかし、目的を明確にし、検証を前提に使うことで、大きな力になります。二重デバイスの課題を「不満」ではなく「設計課題」と捉えた姿勢は、今後の改善を継続できる組織である証だと感じました。

結びに、今回のモデル事業で最も大きな成果は、「検証できるチームになったこと」です。リーダーだけでなく、職員一人ひとりが意見を出し、話し合い、記録に残し、振り返る。この文化が芽生えたことは、今後の宇寿荘の財産になります。改善を進めると、必ず新たな課題も見えてきます。

しかし、今回確立した「設計→実施→検証→言語化」というプロセスを続ける限り、宇寿荘は必ず自ら前に進むことができると確信しています。宇寿荘の成果は、「入浴時間が短縮されたこと」ではありません。「検証し続けられる組織になったこと」です。

本事例は、県内における生産性向上の好事例として、他施設へも十分に波及可能な取組であると評価いたします。

モデル事業への真摯な取組に敬意を表します。ありがとうございました。

【社会福祉法人みずうみ法人本部室長補佐 武田 和也】

